

‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις ὁ βίος, ὑπόληψις.’

116号 2005.11.6

文・編集・発行
恋 かいこ

LIVE: MUSHA × KUSHA 2005. 9. 3 新宿 ACB



前回ライブを観たときドラムがメンバーチェンジしていて、あまり感動できなかったし、おまけにこの日の MUSA × KUSHA の出番が夜 11 時半だし、行くのをためらっていたのだが、JURASSIC JADE のところに書いたのとおなじことを考えて、「MUSA × KUSHA ならきっとやってくれるはず」と自分にいいかかせてかけていった。

結果は、「行ってよかった!」ドラムのガチャガチャとやかましい感じがまったくなくなっていた。

「蟲役者」という文字のはいた半纏(?)をはおった蟲役者こと梅原がステージに登場。曲の紹介のあとにきまって「ご覧下さい」といった。MUSA × KUSHA のボーカルはギターも弾く池田で、梅原は踊りを踊るのだが、その踊りを見ていると、梅原は身体で歌を歌っているのだということがわかる。だから、「ご覧下さい」という言葉は「お聴き下さい」と同じ意味。身体で観客に語りかけるという踊りの真髓が、梅原の踊りと梅原の詩を歌う池田のボーカルとで、具体性と身体性を持った「歌」になるのだ。その「歌」に、ギター、ベース、キーボード、ドラム、が加わることで、感情がより深くゆり動かされる。ベースのひと、キーボードの人のコーラスもいい。

この日のライブでは梅原がいつになく楽しそうにしているな、と思っていたら、本人が「すごく楽しいです」といった。

上の写真は MUSA × KUSHA の CD/DVD 『反対側へ突き抜ける!!』のジャケットからのコピー。

WORDS: 梅原江史【蟲役者】2005. 7/16 より

最近、ツアー生活が益々生業と化してきた日々(サーカス団みてーだ)な過ごしています。ライブ1本1本を心から楽しんで出来る様になってきて、ある種、やっとスタートラインに立たせた気がします。こないだね、とある友人と遊んだの。結構有名な人。今じゃライブハウスから少し遠ざかっちゃった彼がね、聞くんです。「梅原さんは出会った頃からずっとライブハウス界隈で活動してますけど、楽しいですか?」って。「楽しい善いよって即答しちゃった(笑) 毎日ステージに立っても決してモチベーションが下がる事はないからね。

やり甲斐ってのが見つからなくなっちゃうと何やっても楽しくはならないんだよ。「やり甲斐」ってのが凄く難しいところでき、大抵は努力に対して見返りを求めるよね? 全報われなけりや何の為に頑張ってるのか分からなくなるし、見返りが有り余れば欺瞞と怠惰に陥っちゃうものだよ。信頼も報酬も、自分の努力に見合ったものであれば「やり甲斐」を感じるんだと思う。それを前提にするアーティストっていうのは気楽じゃない職業なんだよね(笑) 人の心を動かすのは、必ずしも割りに合う努力とは限らないから。

梅原江史が「ツアー生活が益々生業と化してきた」と書いていたり、MUSA × KUSHA のホームページを見ると、すごい数のライブをやっているのに驚かされる。ほんと、「毎日ステージに立っている」といえるくらい。それなのに、私が今まで観たライブは、毎回「決してモチベーションが下がる事はない」内容のライブだった。「人の心を動かすのは、必ずしも割りに合う努力とは限らないから」って。心を動かされたほうはどうすればいい?

LIVE: JURASSIC JADE 2005. 10.1 六本木 Y2K



ライブで、感じたことが言葉になって、それについて考えるというのはよくあることだが、この JURASSIC JADE のライブでは、感じたことを考えることのほかに、もうひとつ別のことも考えていた。

感じて考えていたことは、真のアンダーグラウンド・バンドである JURASSIC JADE だけが表現しうる「原始」の世界。それは前号にも書いたとおり、「生と死は分かちがたくひとつのものであり、もともと原始なものである」ということである。

それとは別に考えていたのが「メタリカ」のこと。そのきっかけは GEORGE のベース・プレイだった。

このライブの2週間ほど前に、川崎のチネ・チッタのレイトショーで『メタリカ 真実の瞬間』というドキュメンタリー映画を観た。メタリカが 2003 年に『STANGER』というアルバムを完成させるまでを追った大作である。

上映時間は僅に2時間を越え、そのほとんどがメンバー同士のハヴィーな議論で占められていて、それには「よくやるよ」と感嘆するほかない。

メタリカは(この時点では)ジェームスとテーズとカークの3人で構成しているのだが、その3人のほかに、もうひとつメタリカという存在があって、3人の互いの関係だけでなく、ひとりひとりとメタリカという関係が生じることになる。

JOURNAL: 2005年9月14日 晴れ

陽射しも風も強い日の午後遅く、横須賀の hide MUSEUM に行ってきた。住宅展示場に隣接している MUSEUM のオープンテラスの前には海がひろがっている。閉館を 10 日後にひかえているにしては、入場者が少なく、ゆっくりと館内を見ることができた。「hide のすべてがここにある」と記されている MUSEUM には、hide のギター、車、衣服、写真、直筆原稿、CD、映像、年譜などがセンスよく展示されていて、hide に対する遺族の想いが、おしつけがましくなく伝わってきたが、hide を感じることはできなかった。私にとって、hide のすべては、『Ja,Zoo』というアルバムのなかにある。

1998年、3枚目のソロ・アルバム完成を目前にして死んだ hide について、音楽評論家・小田島大は、『音楽誌が書かない「J ポップ」批評』(宝島文庫)に「いまだ信じられぬ自殺説」と題した文を載せている。

hide の音楽や活動に対する小田島の評はじゅうぶんなげもの、「いまだに、あんなに前向きで情熱あふれる音楽をやっていた男が自ら死を選ぶとは、私にはどうしても思えないのだ」という結びには異議をとんえたい。

前向きなら死を選ぶはずがないという小田島は、死を生の反対語として位置づけている。しかし、hide の『Ja,Zoo』を聴くと、とくにそのなかの『HURRY GO ROUND』を聴くと、「前向きで情熱あふれる音楽をやっている」ということは、それだけ「死を選ぶ」可能性も強いということを感じないではられない。もちろん、ここで問題にしているのは、hide の死が自殺かどうかということではない。

音楽にかぎらず、前向きで情熱あふれる生き方は、つねに死と紙一重の境目で生きるということなのではないかといいたいのである。前向きだから死を選ばないのではない。漫然とした、どうでもいいような、後ろ向きといつてもいいような生き方こそ決して死を選ばないのである。

きっちり前をむいたら、いちばんくっきりと見えるのは死、である。真に前向きであるということは、真に死と向きあうということなのではないだろうか。 hide MUSEUM →



WORDS: ジョージ・ギッシング『ヘンリ・ライクロフトの私記』より

自分が懐中無一文というみじきで、夜ロンドンの町を歩いていたとき、開いた窓から聞こえる音楽が、ちよと昨夜のように、自分の足を止めたことも一再ではなかった。イートン・スクエアでのそういうひとときを、自分にはつきりと思い出すことができる。あの晩のこと、自分は疲れ、飢え、数々の絶望で身を裂かれる思いをしながら、チェルシーへと帰っていった。自分は体を疲労させて、その力で眠り込んで忘れてしまふことができよう。何マイルも何マイルも歩き続けに来たのだ。——そこへ、ピアノの音が聞こえてきたのだ。——その家では妻が催されて見えた、——そして一時間ばかりの間、自分は招待されたどの客もとうてい及ばないと思われるほどに、歎を尽したのであった。そして、自分の貧しい下宿へ着いた時、自分ももう、人を羨む気持ちもなく、欲望にかられることもなくなつて、眠りに入りながら、自分のために弾いてくれ、自分に平和を与えてくれた未知の人に対して、感謝を捧げたのであった。

上記の『ヘンリ・ライクロフトの私記』は古い本で、中西信太郎訳の新潮社版(1951年出版)。新しい岩波文庫版(1985年出版・平井正穂訳)も読んでみたが、やっぱり長くなじんだ訳のほうがしっくりくる。

EVENT: 『昭和80年』昭和80年(2005年)8月8日六本木スーパーデラックス 切腹 Pistols 企画のイベント。鈴木岳彦の詩吟で幕をあげ、最後の高円寺阿波踊りの天水連まで、ダンスあり、詩の朗読あり、パフォーマンスあり、展示ありの盛りだくさんの楽しさ。そして、それらが全部太く一本に纏られているというすばらしさ。天水連にはお祭り嫌いの私も脱帽。林木林(「詩のボクシング」チャンピオン)の詩の朗読を聴けたことがいちばんの収穫でした。

どうやらその関係がひとりひとりを際立たせていくようで、おかげで、3人の互いの関係も際立たざるを得なくなり、まったく妥協の余地がなくなる。それは、いい音楽を創造するとうことあるばかりに、なまぬるい仲良しごっこでもできず、かといって喧嘩別れもできないという、ありていに言ってしまえば絶望的な関係なのである。

GEORGE は JURASSIC JADE に加入したばかりの頃は、「どうよ、このベース・プレイ」っていう観客目線がめだつて、「なんかアア」って思っていたのが、このライブのときなんか、あまりの変貌ぶりに、HIZUMI をさしおいて GEORGE にみとれていたときすらあったくらいで、それで「あ、これはもしかしたらメタリカの…」と考えはじめたのだった。

GEORGE も JURASSIC JADE でやっているうちに際立たざるを得なくなったのではない。3人のオリジナルメンバーとの関係もさることながら、JURASSIC JADE といふ比類ないものと関係していれば、変貌するのは当たり前。この日の GEORGE は観客なんかには目くばらず、たとえその関係が絶望的であろうとも、自分のなかの JURASSIC JADE と真っ向から対峙し、果敢にベースを弾いていた。